The Women's News, Japan

This paper's aim is to promote peace and equality from the point of view of women.

本紙は女性の視点で平和と平等を推進します

女性ニューズ
The Women's News, Japan

発行所　全国婦人新聞社　〒160東京都新宿区西新宿3-7-28宝幸西新宿ビル　電話　03-3343-1846㈹　FAX　03-3348-1890　月3回発行(10日、20日、30日)　振替口座　00150-7-172320　購読料　1年　6,000円(郵送料1,700円を含み前納)

この味、辛口。
アサヒスーパードライ

NGOの活動の拠点へ

東京ウィメンズプラザオープニングイベント

首都の女性の拠点・東京ウィメンズプラザが11月10日オープン。12日まで記念イベントが盛りだくさんに開催された。その中から初日の10日に開かれた世界女性会議報告会「北京発東京へ。そして明日へ」と〝都民による持ち込み企画〟から1つを紹介しよう。

〝共生の社会づくり〟へ！
明日へ、NGOはさらに力を

北京発東京へ

「北京発東京へ。そして明日へ」は、ぼう頭、小宮山洋子さん（NHK解説委員）がNGOフォーラム、縫田曄子さん（世界女性会議・政府代表）が政府間会議中心に報告。小宮山さんは、北欧の主催のパネルディスカッションで聞いたスウェーデンの副首相（女性）の言葉を紹介。「女性問題について北欧の先進性について、一人一人が闘ったからここまで来た。男性もいろいろな生き方をする権利があると北欧の女性は男性を勇気づけているとの言に圧倒された」と。会場でも感嘆のため息。

縫田さんは世界女性を通して会議で高らかに叫ばれたのは〝女性の権利は人権である〟ということと強調。〝共生の社会づくり〟のためのキーワードとして①ジェンダーの視点（女性の視点）②エンパワメント③パートナーシップの三つをあげた。

→右からヤンソン、山下、斎藤さん
←左から小宮山(司会)、縫田さん

このあと縫田さん、小宮山さん（司会）に山下泰子さん（国際女性の地位協会常務理事）、ヤンソン柳沢由実子さん（NGO活動家）、斎藤誠さん（日弁連両性の平等委員会委員）が加わりパネルディスカッション。

ヤンソンさんは、女性と健康のNGOに関わっている立場から、行動綱領審議の中で大議論となったリプロダクティブ　ヘルス／ライツの問題について「人口問題は長く国家の人口管理の問題として考えられてきた。七〇年代末になって出産は女性の一生の中での健康の問題として考えられるようになってきた。出産について女性が決定権を持つということは同意されたが、バチカンやイスラム国の反対で大変わかりにくい文章となった。しかし〈差別撤廃条約〉ではわずか一項である。」とこの十年間で価値観が大きく変化したこと、また変わらせなければならないことを強調。

山下さんは北京会議でNGOの力が伝えられたが、日本のNGOも帰国後連絡体を作り、もっと強力に政府に働きかけようという組織ができ動き始めたことを報告。今後、NGO間の連絡、協力がますます重要になるだろう、と。

斎藤さんは日弁連世界女性会議ワーキンググループ副委員長として会議に参加した。日本女性の社会進出を阻むシステムとして専業主婦に対する税金、年金等の優遇措置があるとし「このためにM型のライフスタイルが固定しパートの賃金は非常に低く押えられている」と専業主婦優遇システムを変えなければダメと強調した。

今後のあり方として、山下さんは「日本のナショナルマシーナリーは弱い。ぜひ女性省を作らせよう」。斎藤さんは、日本教育の中に人権教育がなく、若い世代へのひきつぎも不十分。「学校の社会科で女子差別撤廃条約を教えるようになれば…」という。

こうした討論をすると必ず横文字の言葉がはん乱するが、ヤンソンさんは「日本語に訳しにくいということ自体、日本に人権や女性の視点の概念がないことだろう。みんなでいい日本語訳を作ってみませんか！先人がデモクラシーを民主主義と名訳したように！」

東京都に対する注文も出たあと、縫田さんが「北京会議で日本のNGOの活躍には感銘した。政府に実にいい影響を与えた。この関係を維持したい。ウィメンズプラザはNGOの拠点となり、都は政府との接点の役目を果たしてほしい」と締めくくった。

女と男のサバイバル大作戦
働く女性が元気にトーク

ザ・カイシャ

都民による〝持ち込み企画〟の一つとして、十一日土曜日の午後には東京OL学会とエフ&エムの主催によるシンポジウム「女と男の〝カイシャ〟サバイバル大作戦」が行われ、第二会議室いっぱい、約六十人が参加した。

会社での性差別、理不尽な人事に怒りはあっても、この不況では転職もままならない。それなら明るく元気にやるっきゃない。シンポは「会社のゆがんだ論理にまかれることなく、経済力を失うことなくどうやって組織と闘い、つき合っていくかを考えよう」（主催者）というもので、福沢恵子（フリージャーナリスト＝司会）、伊藤みどり（女性ユニオン東京）委員長）、山口俊明（元時事通信社会部記者）さんがパネラー。

今年三月東京で、一人でも加入できる女性のための労働組合を仲間とともに結成した伊藤さんは、いくつかの職場を経て、現在医薬品関連会社に勤務。「五時から女」を自称、夜間や土日、有給休暇を利用して、女性の労働紛争解決に奔走している。

労組結成前から、問い合わせの電話はひっきりなしで、具体的に相談のあった四十二件について交渉、うち三十件を団交（会社との話し合い）で解決した。本人が会社に労組加入を伝え、伊藤さんらの同席で、大体三、四回の団交で結着するケースが多い。

「勤勉に働いても、一生安泰という時代ではない。女性の場合三十歳定年制に逆戻りしている風潮すら感じられる」と言い、「労働者は法律で守られていることを忘れないで。職場で孤立せずに、もっと気楽に労組を活用して欲しい」と積極的加入を呼びかけた。

山口さんは一九八〇年、会社の指示に反して一カ月の長期有給休暇をとったとして処分を受けたことで裁判（最高裁で敗訴）、九二年に同様の休暇をとり、懲戒解雇された。「会社が憲法」という企業中心社会、働き方に少しでも風穴をあけたい」というのが長期休暇をとった主な理由。

「解雇は痛かったが、企業のリストラ抗撃に対抗するには、こちらも抗撃的にやるしかない。ひどい会社の中身を社会に知らせ、おかしなことを改めさせよう。サバイバルをはかるのは経営側だ」と、強気な発言。

フリーになる前、朝日新聞社に約八年勤めた福沢さんは、自身の〝サバイバル体験〟を話した。入社して記者の過酷な働きぶり（長時間労働）に驚き、労組の女性部結成にあたっては「女だからというのは嫌い」と、不利益を認めたがらない女性が多いのに驚いた。「就業規則はただの紙切れ」。疑問を感じたが、言い出せず、暗黒の日々が三年続いた。入社五年で「やりたい仕事ができない」と実感、あと五年をメドに「フリーランス転職計画」をたてた。一年で十二人の編集者に会う、お金を貯める…などなど。

母親が病気になり、シフト勤務への配転が認められなかったため、結局八年目で会社をやめた。フリーになって「有給休暇を一度もとっていなかった」ことに気がついた。編集の職場は八割方の人が同様で、「同僚に迷惑をかける」「記者は自分を労働者と思っていない」ことが理由。「花形記者でなくても、権利を主張していいんだよ」ということを、後輩記者の耳元でささやきたい」と言う。

会場からは、「契約社員にさせられ年俸が百三十万円ダウン。一度は判を押したが、撤回で闘っている。団交の合い間に、有休でヨーロッパ旅行し、気分転換してきた」と、元気な発言。

「会社に自己実現を求めるのでなく、会社を利用し、キャリアアップをはかり、やりたいことを見つける。会社の常識に従って、社会の常識にはずれるな」そんな伊藤さんの発言でしめくくられた。

軽妙にお国ぶりを語る

スウェーデン、フランスでは…

つづいて第二部は「外国人ゲストトーク」で、スウェーデン公使ラーシュ・ヴァリエーさんとフランス人・ジャーナリスト・コリーヌ・ブレさんが岡沢憲芙さん（早大教授）の司会で話しあった。

スウェーデンはいうまでもなく男女平等先進国。女性は国会議員の四一％、政府の半分、地方政府の五三％を占める。男女差別などなし。フランスは〝革命〟の国だが、女性議員の率わずか六％、男女賃金差もひどく「男性社会の強さ、並みではない」（ブレさん）。

スウェーデンでは育児休暇十二カ月中、男性は必ず一カ月取らなければならないというルールになっており、その間の所得補償も十分。片やフランスは、男は育児休暇を殆どとらず、統計によると家事従事時間は、男二時間に対し女五時間。しかしフランスの女は、しぶとく、スタミナもあり、働きつづけがんばっている。シングルマザーも百万人！

スウェーデンでは「家事育児のできない男に女は声をかけてくれず、自分の考えを持つ女性を男性は魅力的と思う」。対してブレさんが「フランスの男はレベルが低くいまだに可愛いい女を求める。フランスの女はバーを高くしたが、ホモセクシャルがふえちゃった！」に満場大笑い。

日本への注文で、男女平等にほど遠い現状をどうするかについて、ブレさんは「管理社会をなくせ」。ラーシュさんは「女性がまずノーということ。スウェーデンの女がいけないといいつづけた結果、性産業はまず目につかぬくらい減った」。そして、ブレさんは、日本の社会と女性に贈るメッセージを、と言われ、一言「闘え」。

たんぽぽ

江藤隆美氏が総務長官を辞めてくれて少々ホッとしたが、それにしても不快極まるてんまつだ。大体、あの辞任の弁はなんだろう。結局辞めたのは国会運営のためで、「宗教法人法改正案の成立が危ぶまれるから」責任を感じて、だそうで、韓国問題の力の字もない▼こんな人に辞めろと言えない首相にも情けないを通り越しあわれを覚えるほどだが、結局、自民党が〝辞める必要なし〟の態度なら首相も幹事長も何も言えぬというらしい。自民党の代議士会に江藤前総務長官が入って行くと、大拍手で迎えられるところをテレビで映していたが、全く異様な光景だった▼もう、数も忘れてしまうほどひん発する閣僚の問題発言、辞任劇にしろ、この拍手にしろ、国会議員たちに江藤前総務長官同様、歴史認識の全くない人が大勢いるということだろう。いや、ホンネをさぐってみたら、戦前の皇国思想そのままの人が多数派ではないかと思う。恐ろしいことだ▼戦前の国別地図は、日本の領土はまっ赤に塗られていた。地理の授業などで、白地図に赤く彩色しながら、何の疑問もなく〝赤く塗るところ〟がもっと増えればよいと思っていた。大きくなれば、祖国はもっと豊かになると軍国教育下の子どもは無邪気に信じていた。赤く塗られてしまった国の痛みなど考えることもなかった。そのころの自分を考えると胸が痛む▼だが、戦後五十年もたっていっこう踏まれた人々の痛みがわからない、わかろうとしない人びとが、永田町にはたむろしているようである。このような人びとを選んだ国の国民であることをつくづく恥ずかしく思う。

海外通信　インド＝㊴　鳥居千代香

インドの女たち

イスラームの神秘主義詩人ルーミーが書いた物語は自由というものを考えさせてくれる。

「むかしむかし商人である主人のためにうたを歌っていた一羽の鳥がいた。商人はその鳥の歌声をとても楽しみにしており、金の皿で水をやっていた。仕事で旅にでるとき籠のなかの鳥に、おまえが生まれた森のところを通るのでむかしの隣人たちに伝言があるかとたずねた。鳥は、籠のなかで悲しみに沈み、とらわれのうたを歌っていると伝えてください、はやくみんなと再会し、木々のあいだを自由に飛びたいという。商人は籠の鳥の故郷にいくと、メッセージを伝え、私が愛するがために彼女は鳥籠のなかにいられている。彼女は愛する仲間たちと暮らし、自由な気持ちで空を飛び、歌いたいと願っているが、私は彼女の歌声を失いたくないので彼女を手放せないという。商人の言葉を聞いていた鳥たちの一羽が突然叫び声を上げ、枝から地上に落ちてしまった。鳥は死んで動かなかった。商人が家に帰るとかごの鳥に、何が起こったかわからない、おまえのメッセージを伝えると二羽の鳥が地面に落ちて死んでしまったと落えた。すると商人の鳥も突然鳥籠の下に落ちてしまった。商人は、自分の人生はこれでおわりだ。鳥が死んでしまったと絶望の声を上げ、鳥を埋めてやろうと鳥を籠から出したそのとき、鳥は舞い上がり、窓から飛び出して、そばの屋根の上にとまり、メッセージを仲間の鳥に伝えてくれた礼をうれしそうに商人にいった。〝あの鳥はわたしが自由をかちとる方法を教えてくれたのです。わたしがすべきことは死ぬことだったのです。わたしが死を選んだときに自由をえることができたのです……ご主人様、永久にさようなら……〟」

生きるために愛する者の所へ行くためには、命を投げだすことさえ必要であり、金の皿で食事を与えられ、籠のなかで安全であっても自由がなければ死んだほうがよいということである。

この物語を読むと結婚制度を考えてしまう。鳥は女性、主人は男性、籠は結婚制度である。結婚により自由を制限され、夫をよろこばせなければならないのは女性のほうだ。安全と衣食住をもとめて女性は籠のなかに入って行く。夢を描かされて入った結婚の実態は出産、子育て、家事労働であるようだ。

インドでいう中流階級は、日本人の考える中流ではなくむしろ上層の人々のことである（インド人口の約十％）。夫が銀行家、実業家、大学教授、公務員、医者、エンジニア、軍人などの職業についている。インドでは夫が台所に入ることはほとんどなく、職業を持つ女性の場合、夫と家事の分担はほとんど期待できない。

ヒンズー教徒の花嫁
（撮影　筆者）

自由を制限する結婚
鳥かごに入って行く女達

しかし、日本の女性より恵まれているのは中流階級では家事手伝いや子守を雇う習慣があり、妻が家事や子守をしないことに後ろめたさを感じなくてすむことである。中流階級のジョイント・ファミリー（拡大家族）の習慣からも、家のなかで子供をみてくれる家族をえるのが容易である。しかし、家のことと仕事を両立させていく悩みはなくはない。

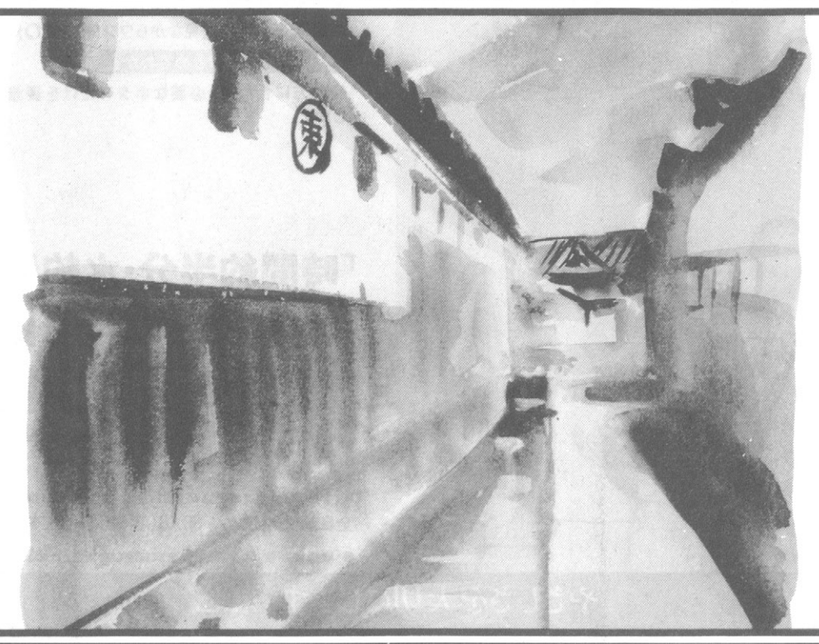
鳥籠のようなところに入らないで仕事だけを取る女性も出てきているが、数は少なく、大部分の女性は離婚を優先する。結婚の実態を知って鳥籠から女性が逃げてしまったり、鳥籠に入れて手放してくれそうにない夫の手に捕えられるのを恐れて女性が逃げてしまわないように、インドの女性は紀元前二〇〇年から紀元後二〇〇年ころからすでに宗教を通して女性の価値は結婚をすることで与えられるとふきこまれてきた。

「結婚は婦人のための、ヴェーダの浄法「サンスカーラ」にして、（男子の入門式に相当すべきもの）と宣べられる。夫への奉仕は、師（家）の居住に（相当し）又家庭の義務は、聖火の（日々の）礼拝（に等し）（『マヌの法典』）。

「女性ニューズ」は、読者とともにつくる新聞です

パネラー、参加者からも元気な発言があった

三百六十五日の
おいしさをつくる
うすくちの里、龍野



白壁を、石垣を
緑の風が吹きぬける——
詩情あふれる小京都として
歴史が息づく播州　龍野、
この美しい国の
美しい風土から、
おいしさを発信します。
ご家庭に旬のよろこび
お届けします。

ヒガシマル
うすくち醤油発祥の地＞兵庫県龍野市 ヒガシマル醤油株式会社

情報スクランブル 読者のひろば

みんなのページです。言いたいことや、知らせたいことがあったら、どんどん投稿して下さい。

編集部 電話 03(3343)1846 FAX 03(3348)1890

響け！女たちの怒り
沖縄からの告発
「あごら」で大特集号

少女レイプ事件で憤ったとあるお母さんが、沖縄の怒り、沖縄の集会を受け持ち「特集・軍隊と女たちの闘い」を企画した。この「怒り」にヤマトの女たちの反応は、どうだったのか。

この「怒り」にヤマトの女たちは、どう応えたのか。

「あごら」の特集は、沖縄について理解を深めるために、ヤマトの女たちの反応を紹介した。

内容は、「はせ」おきなわ女のアンケート・軍事基地・軍隊・戦争について考えます／93字ほど、A5判4ページ。

ヤマトの人びとに少しでも理解してもらえるよう、郵便振替00120-0-7522番へ。

「女性情報年鑑」
読みやすく詳細な内容

'95年版

パド・ウィメンズ・オフィスが、新聞・載った情報を、女性の年鑑として重ねて出版した。

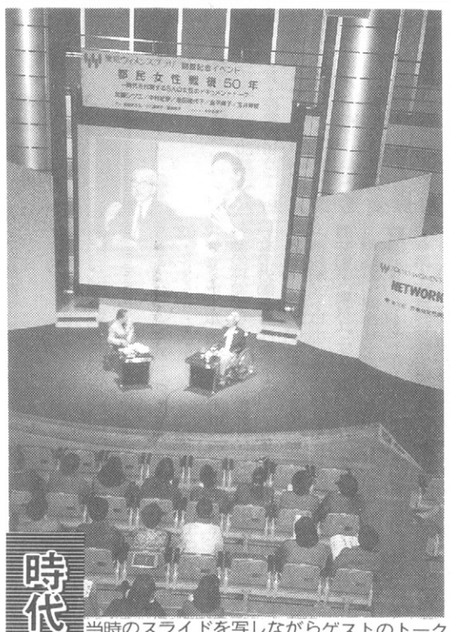
体系的にまとめたもので、読みやすく、日本で唯一の女性の年鑑として重ねて出版した。

年鑑は、94年1月から12月までの、全国の新聞・雑誌・ホーム・ページ・ニュースレター・ラジオ・テレビ・ビデオ・ネットワークの一覧などの、情報源の情報源を、編集部員が、「H ERSTORY」（総合）、「政策・女性企業・起業」（ビジネス）、「女たち・育児・保育」（高齢社会）ニュース

女性はどう生きてきたか

激動の戦後50年つづる
東京ウィメンズプラザ 開館イベントから

戦後五十年、女性はどう生きてきたか。めまぐるしく変わった世の中の移り変わりの中で女性の運動と軌跡を、時代を代表する五人の女性のトークでつづる催しが、東京ウイメンズプラザの開館記念イベントの一環として行われた。（十一日、十三時三十分）



当時のスライドを写しながらゲストのトーク

時代を代表する5人が語る

女性運動の軌跡

昭和二十年代と言えば「新憲法誕生と婦人参政権」。語ったのは、戦後初の選挙で衆院議員に当選した加藤シヅエさん。足を痛めて車いすで登場したが九十六歳の今もかくしゃく。

加藤さんはこのとき最高点当選、また、夫・勘十氏とのおしどり当選でさわがれた。「戦前から婦選運動、産児制限運動をしていたので名前が知られていたのね。金をつかわず言論のみで当選しました」。

こんな加藤さんも自分が出馬とは考えず、はじめ勘十氏の選挙の仕度をしており、総司令部の人にいつ立候補するの?と聞かれて、ああそうだ、と思いついたという。司会の永井多恵子さん（NHK解説委員）に「どうして?と聞かれ「それはね、人間の知識とカンは一致しないのよ」。満場大笑い。

第一回選挙は大選挙区連記制だったので、大抵の人が一人は女性の名を書いた。「三十九人も当選して一番驚いたのはマッカーサー元帥でしょう」と笑う。ついこの間まで無能力者扱いだった女性がこんなにたくさん立候補し当選までするとは！　憲法制定委員会に加藤さんはぜひ入りたいと思った。封建的家族制度をなくさなければと思ったからだが、社会党の幹部に「あなたは日本の家庭を破壊するつもりか」と言われる始末。ようやく委員会に入り、女性として大いに発言したという。

三十年代は中村紀伊さん（主婦会館理事長）。参院議員に当選した母、奥むめおさんの秘書をしていた昭和二十三年。庶民の生活は大変なのに議会では問題にもしようとしない。奥むめおさんは、直接的運動をやろうと、燃えないマッチ追放大会をやった。当時の家庭では必需品だったマッチだが、配給の品は悪くてなかなか火がつかない。中村さんらがメガホンで人々に大会のことを知らすと、主婦たちが粗悪マッチを抱えてぞくぞく集まり、業者をあやまらせ、良い製品と取り替えさせた。これが「主婦連」のはじまり。以来、値上げ反対に、品質に、消費者運動のさきがけとなる運動を続ける。昭和三十一年主婦会館を建設。集まろうにも場所がない悩みを――。女性たちの拠点づくりのハシリだった。

四十年代を語ったのは劇画家の池田理代子さん。当時、教育大の学生。学園紛争渦巻く年でもあった。「四十五年は七〇年安保の年でもあり、万博の年。〝万博〟で政府は安保を乗り切れたと思っている」。

はじめて挫折感を味わい、さらに昭和四十七年の浅間山荘事件で「学生運動の行きついたところがこれか」とまた挫折感を抱いた。しかし、池田さんの作品の下地には当時の思いがある。「フランス革命の男たちの女性に対する意識の古さ。女性革命家たちは悲惨な結末に陥っている」。女性の視点で登場人物をつくった「ベルバラ」だが、はじめ雑誌の編集部は〝女に歴史物などわかるはずがない〟と連載に半信半疑だったという。

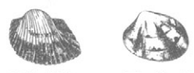
五十年代は国際婦人年の年。語ったのは金平輝子前都副知事。金平さんは当時、都の青少年部長。都が自治体の中でいち早く女性問題に取り組んだのは、当時の美濃部都知事の、これはやらねばならないという意気込みだった。「トップの判断は大きい」。そして、「女性が都政にものをいうようになった年だった」と。

最後に六十年代は講談師の宝井琴桜さん。男の世界だった講談で、女性で初めて真打ちとなった琴桜さんは、現代の女性問題や均等法や育休をわかりやすく創作講談にした「山下さんちの物語」などでひっぱりだこの人気。今、講談師の世界は、女性の方が五割を超え多数派になったのだそうで、満場の参加者から感嘆の拍手が送られていた。

キリバスの巻⑨

みちかな 東西南北

炎天下コイコイ貝掘り
離島食料事情


サルボウ　アサリ

タビテウェア・サウスという離島に、日本政府の無償援助の現場監督として派遣された青年の通訳として行ったときのことである。

島営の「ゲストハウス」に泊まるのだが、パンダナスと椰子の木で作った小屋。寝室が三つと台所と食堂があるが、トイレと行水の小屋は別棟。井戸があるが、ポンプのゴムがすり切れていてバケツ一杯汲むのに三分くらいかかる。

困ったのは食事。魚と貝、それにタコくらいしかないのに、この現場監督の日本青年、典型的な現代っ子、魚と聞いただけで顔をしかめる。缶詰のコーンビーフばかり食べている。ほかに持っているのはレトルトのカレーとビーフシチュー五袋。私の口に入る分はない。到着の日から私は食料探しにかけまわった。

誰かが網を担いで漁に出ると、後を追いかけ、網を張るのを手伝い、一匹頂戴する。いつも携帯している刺し身包丁で早速刺身に。青年はこわごわ一切れ口にした。目をつぶってのみこんだ。

親切なコックのおばさんがコイコイという貝を採ってきてくれた。アサリをペシャンコにしたような貝でとてもおいしい。青年は、初めの日は食べようともしなかった。二日目、もうほかの食料は全くない。決心して一口食べた。にっこりおいしいという。それからは、コイコイのことばかり。

資材のチャーター便が五日も遅れた。やることもない、食べ物もない。毎日、引き潮の浜辺にコイコイ掘りに出かけた。スプーンで二十㌢も掘る。手には豆、えり首は直射日光にさらされ、恐ろしいことになった。その後一カ月以上もヒリヒリ苦しんだ。

離島では野菜も果物も全く手に入らない。ようやくカボチャの芽をもらった。コイコイをむき身にして一しょに炒めて食べた。こんなにおいしいものがこの世の中にあるのかと思った。

（峰岸睦子）

新製品紹介

より高い「質」と「味わい」を追求

キッコーマン株式会社では、フルボトル（720㍄）

マンズ・ニューハーベスト

これまでのワイン市場は低価格が売れ筋だったが、同社の調査によると、最近では、多少価格は上がってもおいしいワインを求めていることが分かったという。

現在発売中の「マンズ・ニューハーベスト」は、七百円。マンズワインの技術者が、直接海外の現地で品質管理した外国産ワインと、勝沼ワイナリーの国産葡萄百％ワインをブレンド。この価格でより高い「質」と「味わい」を追求した。商品の裏ラベルには、葡萄品種名、原産国、醸造地を明記してあるのもうれしい。赤、白、ロゼの三種類。

の新しいスタンダードワイン「マンズ・ニューハーベスト」を好評発売中。

エンジョイスープス

▶187◀

ヘルシーメニュー

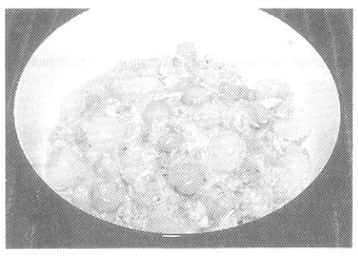
この時期には、新鮮な銀杏が市場に出回っています。季節を演出する料理に使えて便利です。そこで今回は、銀杏と、ごく日常的な野菜の大根ときゅうりに、かにの身を加え、コクを出した「銀杏のコロコロすり流し」を作ります。

使うスパイスは、ホワイトペパーとタイム。とりガラスープやかに等の臭みをとり、銀杏の青臭さも弱まります。子どももおいしく食べられるので、是非、チャレンジして下さい。

鳥がらスープの臭み取りにタイム
子供にもおいしく食べられる

きゅうりのグリーンと大根のホワイト。目のさめるような色合い

ミキサーにかけたぎんなんを流します


まろやかな味わいの中華風煮物の出来上がり

《ぎんなんのコロコロすり流し》

【材料】（4人分）

ぎんなん…30粒、大根（中）…1本、きゅうり…2本、かにのほぐし身…100g、ねぎ…10㎝、粉…小さじ2、しょうが…10g、とりガラスープ…2C、塩…小さじ¾、酒…大さじ1、スパイス＝（ホワイトペパー…小さじ⅓、タイム…小さじ¼）、サラダ油…大さじ2、水溶き片栗粉…小さじ2

【作り方】

①ぎんなんは殻をむき、ゆでながら薄皮をとり、10粒残して、後はミキサー（分量外の水50㏄）にかける。

②大根は丸型のくりぬき器（直径3㎝）で丸くくりぬき、きゅうりは皮をむき、2㎝の長さに切り、両端を面取りしながら丸く整え、両方とも色よくゆでる。

③かにの身をほぐして骨をとり、ねぎ、しょうがはみじん切りにする。

④中華鍋をよく熱し、油を入れ、中火でねぎ、しょうがを炒め香りがたったら、かにの身を加えスープを注ぐ。

⑤ゆでた大根、きゅうり、ぎんなん、ミキサーにかけたぎんなんを入れ、塩、酒で調味し中火で15分ほど煮、大根が柔らかくなったら水溶き片栗粉でとろみを付ける。

（ワンポイントアドバイス）

出始めのぎんなんを使うと、とてもきれいなグリーンに仕上がります。タイムの代わりにブーケガルニを使っても良いでしょう。

（資料提供・ライオン家庭科学研究所／料理指導・園田ヒロ子）

出かけてみませんか

11月

▼核実験中止を求めるコンサート
24日(金)18時30分　調布市民会館たづくり　森園勝敏セッション　柳原幼一郎（たま）他　2000円（当日2500円）　主催…ストップ核実験連絡会☎03・3222・1091

▼丹沢裕子作品展「地球にやさしいペーパーワーク」
29日(水)まで10時～18時　T3横須賀・東京ガス横須賀ショールームギャラリー　植物をモチーフに、古新聞や牛乳パックを再生した〝紙〟から創作した、切り紙とはひと味違った作品　問い合わせ…同ショールーム☎0468・26・3885

12月

▼婦選会館バザー
1日(金)、2日(土)10時～16時　婦選会館　出品は食料、衣料（新・旧）、日用雑貨、手づくり食堂ほか　バザー券100円　問い合わせ…同館☎03・3370・0238

▼みずら・チャリティ・Xmasパーティ
2日(土)18時　JAZZ PUB・DOLPHY（ドルフィー）　横浜の下町、野毛のジャズ・パブでアットホームに。ピアノ・ライブもある。お菓子、食べ物の持ち込み大歓迎　チケット料金…大人2500円、こども1500円（チケット申し込みは11月24日まで）問い合わせ…みずら☎045・451・3776

NTTサンクスフェアスペシャル企画
クイズ・パラダイス！
QUIZ PARADISE
電話・ファクスでクイズにチャレンジ
今すぐ 0120-394912（サンクスクイズ）にアクセスしよう［電話かファクスで、どなたでも参加できます！］
正解者の中から抽選で3,000名様に全国百貨店共通商品券（5,000円相当）をプレゼント！
サンクスフェア期間中［11/1(水)～12/31(日)］に、電話かファクスで通話料無料のフリーダイヤルにアクセス、ガイダンスに従って、クイズにチャレンジしてください。コースは［アニメ・TVゲームコース］［エンタテイメントコース］［スポーツコース］の3コース、あなたの得意なジャンルで挑戦してね！見事全問クリアされた方のなかから、抽選で3,000名様に「全国百貨店共通商品券（5,000円相当）」が当たります。このチャンスにドンドン参加しようっ！
■期　間：平成7年11月1日(水)～12月31日(日)
■応募方法：0120-394912にアクセスしていただき、ガイダンスに従って、電話の場合は「1#」を、ファクスの場合は「2#」をプッシュしてください。プッシュされた後、クイズのコースを選択していただき、クイズがスタートします。
［電話の場合］全問クリアされた時点で、連絡先電話番号をプッシュ入力、住所、氏名を音声録音していただきます。
［ファクスの場合］問題兼回答用紙が送られてきます。全問回答し、住所、氏名等の所定事項をご記入のうえ、0120-394912にアクセスしていただき、ガイダンスに従って、ファクス送付してください。
■応募締切：平成7年12月31日(日)　当日受付分有効
■抽選・発表：厳正な抽選のうえ、ご当選者には賞品の発送をもって発表にかえさせていただきます。
※ダイヤル回線の場合、ご利用になれない場合があります。※回線が混み合ってかかりにくくなる場合がございます。あらかじめご了承ください。
「クイズ・パラダイス」に関するお問い合わせは 0120-394860までどうぞ。
受付時間／午前10時～午後5時（月曜～金曜）土曜、日曜、祝日および年末年始については、休業とさせていただきます。